

## 議 事 録

会議の名称	第1回三田市総合計画審議会 第3部会
開催の日時	令和3年7月9日（金）18時30分～20時30分
開催の場所	三田市役所 本庁舎3階302会議室
出席した委員の氏名	清水部会長、和田副部会長、川原委員、小谷委員、吉田委員、福田委員、小林委員、小川委員、坂場委員、藤田委員、的場委員
欠席した委員の氏名	武田委員
出席した庶務職員の職及び氏名	田中市長公室長、太田政策課長、山谷総合計画策定担当課長、靱井政策課係長、森谷政策課主任 【所管課等】 曾根市民協働室長、井上産業戦略室長、江田産業戦略室参事、横溝文化スポーツ課長、青野産業政策課長、大井農業創造課長、堀農村再生課長、徳岡農業創造課副課長、秦まちのブランド観光課係長、芦田産業政策課係長、川崎産業政策課係長、田中産業政策課主査、藤田農業創造課係長、池田農業創造課係長、喜多農村再生課係長
傍聴者の人数	3名
議 題	1 観光・交流・文化の振興 2 商工業の振興 3 農業の振興
会議の概要（結論）	・「観光・交流・文化の振興」、「商工業の振興」、「農業の振興」について意見交換を行った。
公開・非公開の区分	公開
使用した資料	次第 資料12 第5次総合計画基本計画素案作成シート 「観光・交流・文化の振興」、「商工業の振興」、「農業の振興」
連絡先	市長公室政策課 電話（079）559－5038 内線（2211）

### 1 開会

< 田中市長公室長の司会により開会、配布資料の確認等 >

### 2 議事

#### (1) 観光・交流・文化の振興(地域創生部産業戦略室)

< 江田産業戦略室参事から資料に基づき説明 >

< 意見交換 >

委員：観光について各分野で発信されるが、武庫川桜つつみ回廊、永沢寺の芝桜といったものを集約して見られるサイトがあると助かる。各HP自体は魅力的だが、まとまっていて欲し

い。「さんだのまちを遊ぶ博覧会」等もまとまって体験できると観光に貢献できるのではないか。

部会長：色々存在するコンテンツをつなげるという意見である。

委員：武庫川桜つつみ回廊のイベントは1日だけあるが、悪天候で日にちが合わないこともあるため、日程を伸ばす等の対応は良いと思う。また、伝統文化とつなぐ視点で、武庫川桜つつみ回廊の通過地点である駒宇佐八幡宮の百石踊り等をイベントと合わせるのが良いと思っている。

部会長：何かをきっかけにつながるという意見である。

委員：総合文化センターについて述べたい。文化協会は、11月3日の文化祭の舞台発表の待ち時間にスクリーンで三田各地の伝統文化を披露したことがある。文化祭とは別に、文化協会の特別事業として「お神楽鑑賞会」の公演を行い、その舞台の前に三田市内の秋祭りの神事を披露してもらう機会をもうけたこともある。三田では、駒宇佐八幡宮の百石踊り、大川瀬で歌舞伎、波豆川のお練り、高平の千本搦き等の伝統芸能があると思うので、一堂に見ることは無理かもしれないが、郷の音ホールにそのような企画を持ってきていただければ、三田市民も一同に触れられて良い。

担い手となる若い人も育たなくなっているので募集が必要である。地域外・市外も視野に入れ、PRすることが観光につながってくると思う。

部会長：三田には独自の文化があることを感じている。伝統に関わる人が減るという指摘があり、担い手をどうするのかという視点が必要である。その役割を関西学院大学の学生も期待されているのではないかという印象を持った。

委員：観光においてハード面が整備されていても、それらの情報を伝えないと交流人口は増えない。ホームページの活用やイベント関連についてもいかに伝えるかが重要である。主催者が異なることから、三田市が統一したサイトの運用をすれば交流人口や集客につながるように思った。各団体のイベントを、横ぐしでとらえることが難しいが、横ぐしでとらえ集約することで集客につながると思う。

部会長：各団体が情報発信に力を奪われてはもったいないため、情報を集約してはどうかという意見である。

委員：プロジェクトマッピングの事例を紹介したい。例えば東京・横浜でも集客が多い。ホテルメルクス等に「三田市によろこそ」と投影すると交通機関の利用者の目を引く。あるいは「キッピー」を市役所に投影すれば、市役所の広場に高校生も集まってくるかもしれない。三田の夜は比較的暗く、暗い中での映像は見えやすい。若い人自ら動画を投稿するという活用も可能である。立体に見せる等高度でなければ比較的簡単にできる。

部会長：広野駅や相野駅等に投影したら若い人は来たりするのか。

委員：広野駅なら若い人が多いため来ると思う。もし実施するならば、大規模商業施設の壁面を活用するのがよいと思う。

委員：私は生まれも育ちも三田だが、結婚して丹波篠山市に移った。丹波篠山市民の立場から述べると、篠山城では夜店等で賑わっている様子を見ており、武庫川桜つつみ回廊の現状はもったいないと感じる。丹波篠山市の田園交響ホールでは、比較的有名な方を呼ぶので年配の方が喜んでくれており、大阪や神戸に行かなくても見ることができているので、良いところだと思っている。丹波篠山市と同様に文化ホールを同様に上手に活用すればもっと

人が集まるのではないかと思う。

女性として意見を述べると、三田市の情報誌は沢山出ているが、美容院の方が勧めてくれた冊子が神戸市西区のものであった。同様に三田市でも美味しい食べ物等が沢山あり、魅力的な情報誌が仕上がると思うので、見直せば沢山女性が来ると思う。

三田市で情報を1か所に集める取り組みをされるなら、各構成員に情報提供することもできるので活用して欲しい。

委員：多様性が三田の魅力ではあるが、一方で多様性はポイントをつかみにくい面があると感じている。地域のお祭り等を集約してどうPRするかがポイントになると思う。三田市外から三田市に行こうと思っている人は良いが、そこまでではない人には目に訴えかける方法を取るのが良いと感じた。電車内から屋外を見るのはインパクトがある。三田市は、JRでは田園地帯 - 市街地 - 田園地帯を移動する構造なので、インパクトがあるものが目に入ると惹かれると思う。

丹波篠山市では、サル学の河合雅雄先生の存在や「森の学校」のロケ地で知られており、観光客が来ており、隣接都市でも話題性がある。映画やドラマで人気のある人が出れば、若い人は気になったら調べて来てくれるので、時代に沿った宣伝を行うことが重要だと思う。

部会長：多様性によって印象が薄くなる点は重要な指摘であり、他地域との差別化が難しくなるという危惧が生まれる。

委員：観光、文化、芸術について良いものが沢山ある。「トライやる・ウィーク」ように小中学生のうちにこれらに触れる施策はよい。子どもが興味を持つものには、親も子どもを応援したくなるし、興味を持ってくれる。子どもの頃に経験したことは覚えているし、担い手として帰ってくる可能性もある。市内には神楽保存会もあり、それらも継承の一助ともなるのではないかと考えている。小中学での体験があれば市の独自性がでるのではないかと考えた。

部会長：子どもたちに伝わって伝承されるという形になって欲しいと思った。

副部会長：経済の観点から2点述べたい。教育に関連して、コンテンツの良いものを作って、地元の子どもたちにガイドをさせることで郷土愛や歴史を教育するという意見があったが、シビックプライドを養うという面でトライアルウィークは良い試みである。子どもたちが自主的にガイドをしてまちが活性化していくようになるとうい。

文化芸術に関して、豊岡市に芸術文化観光専門職大学ができたが、郷の音ホールが学生を巻き込んで、10年後にどういうカリキュラムでどう参加ができるかを考えてはどうか。

また、丹波篠山市とも共通する視点だが、文化ホール公共ホールは今後維持管理が大変になっていく。そこでは広域的に施設を活用するという視点が重要である。周辺地域を仲間として、棲み分けながら運営することが大事である。

部会長：意見を整理すると概ね次のとおり。

- ①伝統・文化に関しては、シビックプライドを醸成するような取り組み等、教育的な観点をいれて取り組んでほしい。
- ②総合文化センターに関しては、近隣市町との連携協力を通じて、それぞれの施設が規模等に応じてすみわけする視点をもって運営することで、三田の独自性が現れるのではないかと。

- ③ポータルサイトや情報発信に関しては、各団体等が横ぐしで発信できるよう集約化する必要がある。また、情報を市民等にプッシュ型で通知できるようにすることも必要である。
- ④プロジェクションマッピング等を通じて、今ある資源の活用をどう活用していくのか検討する必要がある。

## (2) 商工業の振興（地域創生部産業戦略室）

<井上産業戦略室長から資料に基づき説明>

<意見交換>

委員：行政の取り組み⑥にあるように、学生への発信が重要で10年後に繋がる。企業訪問もあるが、工場見学が分かりやすくきっかけになりやすいと思う。オンラインを活用した工場見学を幅広く発信すれば短時間に何カ所も見学することができる。高い知識をもった定年退職者にリターン制度として企業に戻ってもらう制度を作ってはどうか。

また、働き方改革の取り組みはハードルが高いが、徹底的なオンラインの導入や三田市の補助制度等を充実させることで中小企業を支援すれば三田市内への就職が進むのではないか。

部会長：学生はオンラインも活用しやすい。高いスキルを持つ人も多いため、リターン制度、働き方改革等の後押しも効果的である。

委員：学生が三田市で就職するにはまちへの親近感が必要である。現状は、学生と市民が関わっておらず、親近感がなければ大阪・東京に行こうということになる。起業となると三田を選ぶための理由や意見を聞く場が欲しい。関学であれ高校であれ、対面で関わることによって親近感がわく場が欲しい。

部会長：場が欲しいという生の意見である。行政の取り組み⑤に「インキュベーション機能のネットワーク」とあるが、そもそもの場があればネットワークも展開できるという意見である。

委員：交通の要所としての優位性をまだまだ伸ばせる。西宮の阪神流通センターの造成等、工場の立地があり、テクノパークから広がる流れがあるかもしれない。東西南北移動しやすい交通の要所としての位置条件を活かす政策が求められれば、効率的な商工業の発展につながる。

学生との接点としては「まちゼミ」があり、事業者が知識を伝える場となる。様々な話ができるのでぜひ参加して欲しい。

部会長：交通の要所としての三田の立地を更に活かすという意見である。

委員：60代前後のヤングシニア層に関心がある。三田市の場合、多様性はこの分野ではメリットになる。三田市は人口増加率日本一が10年続き、現在も人口が減少傾向とはいえ、一定規模が維持され、ベットタウンとして定着している。そこにはリタイアする人が一定数おり、60代前半の方がどのくらい起業に対して関心があるのか興味があった。まち自体に多様性があるため、大きなビジネスではなくても個人規模の創業で色々なことができ、チャンスはあると思う。成果指標では5年後に3倍の創業件数が目標値となっているが、この目標を目指そうとするのであれば、なおさら定年退職層にPRすることが大事なポイントになると思う。

部会長：多様性を活かす視点、10年後に一層活躍してもらい、市民に起業を促進するという視点、リタイアした能力を持つ方にビジネスを展開してもらおうという視点からの意見が出た。また、創業件数の目標値が3倍のため、ベッドタウンだけではない働く場所としての三田を打ち出せないかと聞かせてもらった。

委員：古い商店街をどうするのかという点から述べると、事業継承がなされておらず、後継者がいない。後継ぎとなる子どもは別に仕事をしている。業種として小売業が多く、大手企業に顧客を奪われている現状となっており、時代の転換期を迎えて継続が難しくなっている。各事業者が努力するのは前提として、どうするかを考えなければならない。就職先で競えば大手企業を選んでしまう。近年は大手企業が高校卒業者を募集しているため、中小企業は高校生に選んでもらえずマッチングが上手くいっていない。中小企業には、働き方改革も難しいという問題があり、人材確保・事業継承が難しく10年後の姿が見えづらくなっている。

先が見える事業は大丈夫だが、10年後が見えない事業は不安である。ネット企業は業績を伸ばしているが、そうでない企業は人口減では経済規模が大きくなるので、横ばい・やや低下あたりが着地点なのではないか。人口減少社会での経済の限らない発展はありえないと思う。

部会長：右肩上がりの発展ではないあり方を成功モデルとして探すという意見であった。

副部会長：事業承継の視点に関しては、事業の栄枯盛衰もあるが、後継者がいないという産業にも目配りが必要である。後継者は必ずしも親戚筋ではなく、例えば若手が事業を買い取る等が考えられる。魅力自体はあるが、後継者がいない産業とやる気はあるが資本や地盤のない若手がマッチングしていくことが必要である。若い人が既存のものをより豊かにしていく、例えば織物のような伝統産業等にアイデアを加えて革新していく事例等があり、若い人の意見によって画期的な成果が生まれるかもしれない。熟練者の意見と若い方とのマッチングという視点を持つてはどうか。

部会長：意見を整理すると概ね次のとおり。

- ①後継者がいない企業と学生を結び付け、起業だけではなく事業継承を考えることも大事である。若者の意見によって画期的な成果が生まれるかもしれないことから、熟練者の意見と若者とのマッチングという視点も必要ではないか。
- ②オンラインやICTの活用が重要であり、市内には高いスキルを持つ人も多く、定年退職者のリターン制度や働き方改革等の後押しにも効果的である。
- ③学生が市内で就職するにはまちへの親近感が必要である。工場見学等を通じて意見を聞く等、対面で関わることによって親近感がわく場を提供してほしい。

### (3) 農業の振興

<井上産業戦略室長から資料に基づき説明>

<意見交換>

委員：小さな農家に関して述べたい。私も兼業農家であり、1町3反ほどで稲作農業を行っているが、三田市内は小さな農家の集まりしかいないと認識している。今後の農地を持続可能にするには収益性の向上が課題であり、小さな農家を沢山増やすことによって、持続可能な農家が増えるのか疑問に感じる。低い収益性や従事者の平均年齢は70歳を超えている

という現状は、そもそも農業よりもサラリーマンの方が、将来性があると思われた結果なのだと思う。自分が稲作を行っている理由は管理しやすいからであり、10アールあたり1年間で2日程度土日祝等の休日のみで、草刈り等の作業をすれば終わってしまう。一方で、1年200日以上働いて手元にお金を残せるかという点と難しく、祖父が守ってきた農地を管理するために米を作っている面が大きい。作った作物は、JAに引き取ってもらうことが多いが、卸された先に対して三田ブランドを作ってもらう努力が必要である。ブランド化の例としては、私が作る米はほとんどが酒米であるが、作り酒屋に三田米をPRしてもらう等。株式会社神明は、あかふじ米をブランドとして普及している。しかし、あかふじ米の原料に三田産が含まれているのに、原料の三田産は消費者に普及しづらい状況である。農業を収益産業とすると小さな農家では難しく、向かうべき方向は逆ではないのか。

三田牛の出荷頭数増に関して述べたい。三田市内で出荷されれば三田牛とネーミングできるが、一方で但馬牛血統を飼育して、神戸に登録すると神戸ビーフとして出荷できる。神戸ビーフとしても登録できるとなると、三田牛ブランドが増えるのかは疑問に感じる。

部会長：収益性が高い・低いという問題ではなく、農家としてどうあるべきか。持続可能な農業につながるのかとの意見をいただいた。三田牛はいかに付加価値をつけるか、三田のブランドの差別化をしないと神戸ビーフとの違いが判らなくなると思う。

委員：総合計画に掲げられている10年後の避けたい未来は、今から10年前も同様であったのではないかと思う。稲作に関しては、三田では兼業農家が8割であり、仕事をしながら農地を管理するには稲作が一番適している。三田米というブランドがあり他地域より高い価格で売られており、直売することで販売額を上げる努力をしている。酒米について、三田産の山田錦が欲しいという酒蔵で取引していたが、コロナ禍で酒が売れず、急遽作付けを減らしてもらうようお願いをする等、これまで維持してきた環境が一転した。稲作が厳しくなってきた。

農産物の特色を活かして拡大するには、稲作に代わって園芸という形で生かしていかなければならないと考えている。黒大豆枝豆は三田も産地であり、多くの生産者が取り組んでいる。機械化やビーンセンターの設置等により生産を助けることで農業所得を上げていきたい。ブランド化で魅力を上げて販売していきたいが、市民の役割として食を買い支えるという形で協力いただきたく、総合計画にも盛り込んで欲しい。

部会長：三田ブランドをどう作るのか。黒大豆枝豆等の活用や市民が買い支えるという点が挙げられた。

委員：専業農家の方には、園芸で収益2千万円から3千万円の農家も存在する。自身の努力もあるが、農業をやっていけないということではない。ただ、簡単に農業はできないという点についても発信が必要だと思う。小さな農家に関しては、3反くらいの耕作地では厳しい状況が続いていると認識している。観光市場で出荷されている農家もいるが、初期投資や高度化に対応していく必要があり、補助金に頼るのは良いとは思わないが、若い農業従事者が生業として生活していけるようになるためには一定の支援が必要だと思う。

部会長：現状について聞き、農業が置かれている実体がもう少し見えるようにしてはどうかと感じた。また、スマート農業についてはいかがか。10年後の視点等からも述べて欲しい。

委員：全国的に大型の農家はICTへの取り組みが進んでおり、小さな機械化は日々進んでいる。コロナ関係の補助事業でICTやドローンの支援があり、共同で取り組む若手農家がいる。

今後この分野は伸びていくだろうが、機器の価格等一定の壁がある。ただ、こうした分野は活用しないといけない分野であり、総合計画の項目から外すことはできないと思っている。

委員：私の娘が高校の生活科で果物を作ったりしたところ、農業を気に入って友人の農業を手伝いたいというくらいになった。収穫体験等、小学生から高校生まで農業を体験する場を作る等、魅力的な取り組みを実施して欲しい。

部会長：学生でも農業体験があったらやりたいという。良いものを作っても知られなければならないのと同じで、情報発信についても項目を入れていただきたい。

委員：小さな農家が儲からない原因は、小さい耕作面積ではトラクター等の償却が無理であり、共同購入等個人負担が減らないからである。儲かっている人は野菜を作っている。野菜は手がかかるものの収益は上がる。以前に農家と商売のマッチングを行ったところ、商売側は農家に配達してもらいたい、農家には取りに来てもらいたいと言われ、配達面がネックとなりマッチングが難しかった。集積地を作る等のアイデアも出たが、なかなか通じ合わないという経過があり、商売という観点で見るとシビアな結果となった。収益の高い農家は直販が多い。観光農園も収益性が高い。補助金を上手く活用している農家もいる。農業も商売という観点でなければ成り立たないと思う。収益性が高くないという観点から補助金が出ると思うが、その意味でしっかりと農業を続けて欲しい。

部会長：商売で考えなければ持続可能性も難しくなるという意見をいただいた。

委員：三田はまちと自然が近く、花と緑と水のまちといわれた。三田のコメは新潟のコシヒカリと同じくらいのうま味があるといわれ、ブランドであると思うが、十分に発信ができていないのかもしれない。我々が子どもの頃は専業農家が多かったが、兼業となり手がかからない米作りが増えたのではないか。田舎の人間はまちに住みたい、まちの人は田舎に住みたい。ただ、まちから農業をしようと移り住み、いきなり3反で始めるには勇気がいるだろう。最初は小さな農家から始め、上手く軌道に乗れば集約して大きな農家になるようにしていけないか。後継者が農村から出て帰ってこないなら、耕作放棄地にするよりも、やりたい人に3反以下の農地であっても農家として活躍できる制度を特例で作ることができないか。三田はまちと自然が近く、消費地が近い。水質や土質がいいということであればおいしいものを地産地消できる。農家をすることがチャンスとってくれるイメージになれば、若者も集まってもらいやすくなるのではないか。

部会長：若い人ができることの入口を広げることができないかという意見であった。10年後のキーワード「さと」には農業の役割が大きい。三田としても「さと」の保全に向けて農業にはしっかり取り組まないといけないと感じた。

副部会長：委員の皆さんから現実的な意見をしっかりと聞かせていただいた。1点目として、10年後の農業について、若い人や退職者が田園回帰・自然を求めているという考えを理解しつつ、収益性は大規模農家でないと成り立たないことから、農業を収益として考えないと見えてこないという点が挙げられた。

2点目として、自作自農や趣味といった収益に関係のない農業が、田園風景としての維持につながるという観点が、収益性ある農業と混在しているように思われた。

三田市としては、その2つの方向性について棲み分けて整理する必要があるのではないかと感じた。

部会長：意見を整理すると概ね次のとおり。

- ①豊かな食を支えるため、生業として収益性を求める農業に対し、自作自農や趣味といった田園風景としての維持につながる農業があり、これら2つの方向性について、棲み分けて整理することをお願いしたい。
- ②担い手不足による耕作放棄地が増える中、若い人や移住者が少ない耕作面積でも農家として活躍できる制度を検討してはどうか。まちづくりの基本目標である「さと」には農業が果たす役割が大きく、「さと」の保全に向けてしっかり取り組む必要がある。
- ③三田ブランドとしてのPR、収穫をはじめとする子ども達への農業体験、魅力的な取り組みの実施等、効果的な情報発信が必要である。
- ④市民の役割として、食を買い支えることを盛り込んで欲しい。

### 3 その他

- ・次回7月14日（水）18：30～
- ・総合戦略部会には、第3部会からは部会長と副部会長が参加する旨を報告した。